【翻　訳】

チェッリーニとその時代（四）

イヴァン・アルナルディ著
松本　典昭　訳

第三章　ローマの生活

チェッリーニがシエナで雇った駅馬にまたがり、はじめてローマに来たのは一五一九年のことだった。同じ馬の尻かいには、フィレンツェの友人で木彫師のジョヴァンバッティスタ・タッソが乗っていた。二人の若者がカッシア街道を旅すること四日間。ミルヴィオ橋を渡り、平野を蛇行するテーヴェレ河にそってフラミニア門［現、ポーポロ門］にいたると、「世界の都（カプト・ムンディ）」と称えられたローマは目の前である。歌ったり笑ったりしながら、二人の旅人が降り立ったのは、やがてポーポロ広場となるはずの場所だが、当時はまだ葡萄の樹々におおわれていた。市中に通じる道も村道とさして変わりはない。それでも教皇シクストゥス四世［在位　一四七一～八四年］のもとで再建されたサンタ・マリア・デル・ポーポロ聖堂（一四七二～七七）は、すでに葡萄畑を背にしてそびえたっていた。

ふらりとやって来たローマにチェッリーニは、滞在と不在、幸運と不運を繰り返しながら一五四〇年までとどまった。最初の旅は一五二一年に終わったが、一五二三年に再来し、一五二七年のローマ劫掠（サッコ・ディ・ローマ）を経験する。皇帝軍の猛威が過ぎ去ると、一五二九年にローマに戻り、一五四〇年までとどまる。この期間は教皇レオ一〇世［在位　一五一三～二一年］からパウルス三世［在位　一五三四～四九年］までの期間にあたり、この二人のあいだにフランドル出身の教皇ハドリアヌス六世［在位　一五二二～二三年］と芸術保護者のメディチ教皇クレメンス七世［在位　一五二三～三四年］がはさまれている。ルネサンスのローマは活気のある都市だった。一六世紀初頭に教皇ユリウス二世［在位　一五〇三～一三年］が着手した都市の再建事業が、反宗教改革の勝利に酔うシクストゥス五世［在位　一五八五～九〇年］にいたるまで、世紀全体を通じて続行していたからである。

したがってチェッリーニは、ローマの歴史の決定的な瞬間に居合わせたことになる。ローマ体験はパリやフィレンツェなど他の都市以上に彼に決定的な影響をあたえ、彼の芸術形成に明らかな刻印をおした。トスカーナの偉大な一五世紀（クアトロチェント）が終わり、いまやルネサンスの美的様式をリードするのはローマであった。ローマに到着したチェッリーニは、ヴァティカンへの途上にある、庶民でにぎわうポンテ地区のバンキ通りに腰を落ち着けた。ここは商人と職人の地区だが、公証人、写字生、印刷業者、書籍業者も住んでいた。パリオーネとレーゴラの両地区にまたがるペッレグリーノ通りには、金細工師たちが住んでいた。チェッリーニはさっそく、ロンバルディア出身の金細工師で「什器の仕事にかけては、めっぽう腕のたつ」ジョヴァンニ・フィレンツォーラの工房の門をたたいた。

都市の周辺部は基本的に中世が色濃く残っていたが、それでも変貌の途上にあった。道路と広場、聖堂と邸宅が建設されつつあった。チェッリーニのようなよそ者の芸術家でも仕事にありつくことができた。最初にやって来たのは建築家。栄光の三巨匠――ブラマンテ、ラファエッロ、ミケランジェロ――のあとには、その追随者たちの一群、シエナ出身のバルダッサーレ・ペルッツィからフィレンツェ出身のサンソビーノまで、パッラーディオからヴィニョーラまで、アントニオ・ダ・サン・ガッロからジャコモ・デッラ・ポルタまで、それから世紀末のドメニコ・フォンターナにいたるまで陸続とつづく。画家や彫刻家も兼

ねた建築家のあとには、おびただしい数の左官と石工、そしてチェッリーニのようなアルテ・ミノーリの職人たち。みんな一旗揚げようとローマに集まった連中だった。

教会の権力志向は、何よりもまず建築の形にあらわれた。このルネサンス的思潮の起源は、前世紀の新しい世界観の創始者レオン・バッティスタ・アルベルティにさかのぼる。このトスカーナの建築家は都市空間の理論家でもあり、その理論から実践されたのは舞台装置に組み込まれた市民芸術である。建築様式は、都市計画のスペクタクル的要素を称揚する彫刻と絵画の影響をすぐにあらわした。人文主義のおかげで、建築は社会的価値をもつ公共芸術になり、商人の経済活動にも刺激をあたえた。商人は、芸術家つまり彫刻家と画家の作品のなかに実用性の美学が誕生するのを目の当たりにした。こうして、建築現場も初期資本主義の誕生に関わり、イデオロギーが建築の形をとって立ち上がったのである。

都市計画と政治は一体だった。古代の輝きをとりもどした建築は、可視的輪郭のうちに依頼主の意思を体現した。つまり、潜在的な富のイメージを公共空間のなかに投影して形象化したのである。

最優先事業はサン・ピエトロ大聖堂の再建だった。教会国家の世紀の大建造物。その建造の歴史は地上の天国に建てられた「神の都」の歴史そのもの。「神殿」を再建するためにユリウス二世がブラマンテを招聘したのは、一五〇六年のこと。以来、調和のとれた理想都市フィレンツェは、イタリア史の主役の座をローマに譲った。だから「永遠の都」に誰も彼もが蝟集したのだ。

チェッリーニもこの潮流に乗った。他の連中と同じように、ローマでは一旗揚げうると分かっていた、少なくともそう期待しえた。若者の前途に未来は開かれている。だが時を無駄にはできない。みずから進んで貴族の邸宅やヴァティカンの居館の門扉を押し開けた。フィレンツェでフランチェスコ・リッピと熱心に研究した「みごとな古器物」がさっそく本当の姿、すなわち闇市で、しかし白昼堂々とスクード金貨を産み落とす気高い姿を現した。

ローマ再建の起点はヴァティカンにあった。ボルゴ地区のヴァティカンが教皇座になった。都市の復興は重心の移動をともなう。古代ローマも中世ローマもカンピドーリオ周辺に基礎があったが、いまやトラステーヴェレに移ったのだ。これはアルベルティの構想であり、重要な記念建造物を避けて周辺部に都市を構築するという意図があった。従来、無価値とされてきた廃墟に価値を認めたアルベルティが、古代建築の救出に道を拓いたのである。

だが、ローマは長いあいだ悲惨な状態で放置されてきた。わずか二キロ四方の、テーヴェレのS字型湾曲部に四万の人口がひしめき、街路は交通不能、路地裏は悪臭を放ち、ゴミはいたるところに山積み状態。腐敗物のかげでネズミが繁殖し、最悪のペストをはじめとする疫病の数々を運んでいた。遺体は聖堂のそばに適当に埋葬。やっと一五六五年に教皇パウルス四世が禁止令を発するまで、糞尿は街路にまき放題。

リーパ地区とカンポ・マルツィオ地区のあいだは、とりわけ改善が必要な地域であった。いちばん悪臭芬々たる地区は、ピーニャ地区、サン・エウスタキオ地区、パリオーネ地区、レーゴラ地区、そしてあやうくペストに感染しかけたチェッリーニが住むポンテ地区であった。

しかし、他の地区も、ヴァティカンのあるボルゴ地区を別にすれば、これよりましだったわけではない。フォロ・トライアーノ界隈に住んでいたミケランジェロは、ペストの温床と考えられた中心街を避け、人里離れて暮らすことを選んだが、彼の家でさえ理想とはほど遠かった。事実、有名なソネットにあるように、「だれかれとなく糞をひりに」門前にやって来たのだった。[1]

聖職者やヴァティカンの役人が集中していたのは、ボルゴ地区の他にはパリオーネ地区である。彼らの館は上品にとりすましていたが、隣接する見苦しい路地では、娼婦たちの闇商売が花盛り。その横のレーゴラ地区は職人でにぎわい、鍛冶屋通り、仕立屋通り、鍵屋通り、秤屋通りと職種名が街路名になっていた。ファルネーゼ邸が建設されると、このあたりにも文学者や知識人がちらほら住み始めた。その北のポンテ地区はローマの本当の意味の中心街で、商取引きの中心地のバンキ（銀行）通りがあった。

この界隈がチェッリーニの身丈にあった空間だった。工房をかまえ、数々の傍若無人な振る舞いにおよんだ。極彩色の活気にあふれる環境が、煮えたぎる彼の本性に一致していたのである。商人と高位聖職者、銀行家と宮廷人、芸術家と書籍商がごちゃごちゃと混在していたうえに、この界隈にはヴァティカン詣での巡礼者があふれていた。お祭り騒ぎや刃傷沙汰にはことかかない。教皇選挙期間ともなると、生活はいやがうえにも熱狂したというのは、財政の中心の造幣局の周辺で教皇選挙賭博が派手にくりひろげられたからである。負けず劣らずチェッリーニも身辺に起こるこうした出来事に熱中した。ただし周知のごとく、ケチだったので賭け事には手を出さなかった。

賭け事には無縁だったが、他の多くの悪事には縁があった。新バンキ通りと旧バンキ通り、あるいはその周辺の路地が、金細工師の数知れない無鉄砲な冒険と不祥事の舞台となった。工房のあるバンキ通りで、公証人セル・ベネデットの頭を石でかち割り、「おびただしい流血を見て、死んだものと判断した」事件があった。やはりバンキ通りでのこと、胸くその悪いライヴァルの宝飾師ミラノ出身のポンペーオをサンタ・ルチアの排水渠の片隅で殺害したこともあった。弟のチェッキーノが犠牲になった喧嘩の発端も、やはりバンキ通りだった。バンキ通りからほど遠からぬ、パリオーネ地区のトッレ・サングィーニャで、ローマ随一と評判の「シニョーラ・アンテーアという名」の娼婦の家のそばで仇討ちを敢行したこともあった。同じバンキ通り付近でのこと、親友の娼婦パンタシレーアがルイジ・プルチと密会している現場を襲ったこともあった。

それはチェッリーニが（少なくとも話のなかでは）おおいに楽しんだ、まったく冗談ごとではないが、おかしな事件であった。深刻な流血にもかかわらず、はじめて致命的な結果にいたらずに終わった、一場の滑稽譚である。チェッリーニは怒り狂って(かつ酔っぱらって)、夜のローマをあてどなくさまよう。彼に内緒でできていた二人の裏切り者を捜していたのだ。チェッリーニは美妓パンタシレーアにはいつも男友達のサーヴィスにあたるよう命じていたくせに、いざ自分が寝取られ男になった(真偽はともかく)と思うと腹の虫がおさまらない。バンキ通りの裏手にある娼婦の家の門前で待ち伏せをする。そこへ友人の画家バッキアッカがやって来る。画家はチェッリーニから娼婦を譲り受けてかりそめの情夫になったばかりだった。バッキアッカはチェッ

リーニをなだめようとするが、無駄。逆にチェッリーニは相棒にまで向かっ腹をたて、剣をかざしてどやしつける。気の毒なバッキアッカは腹痛を起こし、――「便意をもよおし」――すぐその場で、とはすなわち「ローモロという名の」居酒屋のまえで、よんどころなくしゃがみ込んで、排便におよぶ。その時も時、じゃれあったパンタシレーアとルイジ・プルチが帰宅したので、チェッリーニは剣を抜き払って二人に襲いかかるが早いか、バッキアッカはズボン片手に尻を丸出しのまま一目散に逃げ去る。あとには深手を負った男女二人が血の海のなかに倒れていた。

この中世風の一場は、乱暴狼藉が支配するローマの風景を背景にしている。チェンチ家、クレシェンツィ家、フランジパーネ家、サングィーニ家などの好戦的な貴族が建てた城塞のような塔の数々は、往古の伝統である内部抗争の証として残存していた。古い党派争いは完全には鎮まっていなかった。というのも、オルシーニ家とコロンナ家の抗争が、今度は皇帝カール五世とフランス王フランソワ一世によるイタリア戦争と重なって続いたからである。一五二六年、コロンナ軍がローマを襲撃しヴァティカンを略奪したとき、裕福な商人デル・ベーネ家が財宝を守るためにチェッリーニを雇い入れたことがあるので、チェッリーニ自身も内部抗争のいくぶんかは肌身をもって知っていたことになる。これはローマ劫掠（サッコ・ディ・ローマ）の序曲となる事件である。

さて、いくつかの再建事業や建設事業（ヴェネツィア館、カンチェッレリーア館、ファルネーゼ邸）があるにはあったが、ローマは依然として中世的な外観をもつ雑然たる都市であった。クイリナーレ丘、ヴィミナーレ丘、エスクイリーノ丘にむかう丘陵方面には、わずかな聖堂（サンタ・マリア・マッジョーレ、サン・ピエトロ・イン・ヴィンコリ）と廃墟（ディオクレティアヌス帝の浴場）があるほかは、ほとんど何もないに等しかった。丘の稜線には中世の砦と櫓の残骸が点在していた。逆にテーヴェレ河にむかう低地方面には、鐘楼が林立していた。実際、フランドル人画家ファン・ヘームスケルクの素描を見ると、一五三五年にはローマの聖堂の大半がまだ鐘楼をそなえていたことが分かる。教皇シクストゥス四世のもとで建設された数少ない円蓋（サンタ・マリア・デル・ポーポロ聖堂、サント・アゴスティーノ聖堂）は、まだローマに威風堂々とした外観をあたえるほどではなかった。そうした印象は、バロック時代の円蓋、なかでもとりわけサン・ピエトロ大聖堂の大円蓋の完成（一五八八年）をまってはじめて実感されるものであった。

教皇都市はいくつかの巨大建築を内蔵していた。マルケルス劇場、パンテオン、ドミティアヌス帝の競技場（のちにこの競技場はナヴォーナ広場という市民の憩いの場になる）、そしてバルジェロすなわち警察本部（ここは、盗難届けを出したり、尋問や逮捕のために連行されたりと、チェッリーニがしょっちゅう厄介になった場所）。さらに建造物のなかには建設中でまだ偉観を呈してはいないが、重要な価値をもつコルネート枢機卿邸（のちのトルローニア邸）、オロロージョ邸、スフォルツァ邸があった。この最後のスフォルツァ邸で、ある日、チェッリーニがいつも携帯している猟銃で鳩を撃ったことがあった。これはのちになって、その日、チェッリーニが宿敵グイド・アスカニオ・スフォルツァ枢機卿の殺害を企てたとして起訴されることがなかったならば、別段とるにたらない出来事であった。

まだまだある。ナルディーニ邸、オルシーニ邸、ピッコローミニ邸、メッリーニ邸、カプラーニカ邸。それからチェッリーニゆかりのメディチ邸（現、マダーマ邸）。この屋敷は彼にとってローマの避難所だった。事実、破廉恥な悪事をはたらくと、すぐにメディチ邸に駆け込むのを常とした。最後にいくつかの聖堂と宗教施設。サンタ・マリア・デッラニマと付属のフランドル人宿泊所、サン・ジャコモとスウェーデン人宿泊所、そしてサン・アントニオ・デイ・ポルトゲージ、サン・ロレンツォ・イン・ルチーナ、サン・オノフリオ、サンタ・マリア・デッラ・ミネルヴァ、それからサン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ。この最後の聖堂に、チェッリーニは弟チェッキーノを埋葬し、墓の上には、獅子（いかがわしい家紋）と「必ず仇を討つように」という意味をこめて一挺の斧を彫った石盤を置かせた。一五二九年五月二七日のことだった。それからほどなく、冷血な復讐はなしとげられた。

このように根っから粗暴な男であったため、ローマの善良で上品で知的な階級には加われなかった。上流階級の邸宅でも場違いな闖入者にすぎない。しかし、貴族の社会生活に加われないといっても、金細工師は職業柄、教皇の宮殿や庭園には自由な出入りが許されて頻繁に足を運んだ。さらに制作を依頼したファルネーゼ家、キージ家、コルナーロ家、サルヴィアーティ家、チーボ家、オルシーニ家、メディチ家といった貴族の豪邸にも気安くあがりこんだ。また地位の高い文人のピエトロ・ベンボやアンニーバレ・カーロとも知遇を得、ときおり晩餐をともにしたが、こちらのほうは足繁く通ったわけではなかった。ともあれ貴族や聖職者や文人といった種族は彼の肌には合わなかったのだ。

チェッリーニは淫売や遊び仲間と乱痴気騒ぎをするほうが性に合っていた。血の気が多く、体格はよく、色を好む。居酒屋通いは頻繁。彼の生活圏で居酒屋を捜すのに苦労はしない。グレコ・ワインをたらふく飲めば、浮かれてごろつきどもの仲間入り。彼の遊び仲間には、サンタ・マリア・デッラニマ聖堂のハドリアヌス六世墓碑を制作した彫刻家ミケランジェロ・ディ・ベルナルディーノもいれば、師匠の作品を仕上げた「偉大なラファエッロの驚嘆すべき弟子たち」のジュリオ・ロマーノとジャン・フランチェスコ・ペンニもいれば、アンドレア・デル・サルトの弟子で、チェッリーニと同じくらい喧嘩早いロッソ・フィオレンティーノもいたし、例の画家バッキアッカもいた。みんな陽気な遊び仲間で、ローマ劫掠（サッコ・ディ・ローマ）のときまで、晩飯、昼飯、踊りに祭り（そのすべてが教会法にかなったものではなく、半ば異教的）と、ことあるごとに寄り集まった。全員、ルネサンスの建築熱にわきたつ都市のリズムに便乗し、熱い血潮をかきたてた、芸術と甘い生活の崇拝者たる画家と彫刻家の面々であった。

ピントゥリッキオ、ペルジーノ、ボッティチェリ、シニョレッリ、ギルランダイオ、ラファエッロ、ミケランジェロ、彼らはみな神の栄光のために仕事をした、あるいはしつつあった。[2] チェッリーニは研究にも没頭した。「当時、ミケランジェロの礼拝堂にスケッチをしに通った」。一五二三年。金細工師兼教皇楽団指揮者サンティ・ディ・コーラの工房で、ルカ・アニョロ・ダ・ジェズィといっしょに修業していたときである。

一六世紀にカンチェッレリーア館、リアーリオ邸、ファルネーゼ邸、

サルヴィアーティ邸、スパーダ邸、カエターニ邸など六〇を超える邸宅が着工された。ブラマンテ、ラファエッロ、ミケランジェロ、ヴィニョーラ、デッラ・ポルタらがこれらの大建築にとりくんだ。豪邸の他に別荘が加わる。ファルネジーナ荘［もとアゴスティーニ・キージの別荘］とマッテーイ荘（現、チェリモンターナ荘）。最後に本当の意味の公共建築がそびえる。二つだけ例をあげれば、サピエンツァ（ローマ大学）とトリニタ・デイ・ペッレグリーニ。まったく息の切れる駆け足だ。要するに、テーヴェレ河の此岸と彼岸に二つのローマがあって、こちらが聖なる都とすればあちらが俗なる都。二つながらに、「宮殿の形をした都市」（バルダッサーレ・カスティリオーネの言葉）のルネサンス的任務に応えていたのである。[3]

邸宅には道路と広場が対応する。世紀初頭の教皇ユリウス二世のもと、バンキ通りとシスト橋をむすぶジュリア通りが開通した。ここはチェッリーニにとって不運の道、いまいましい場所だった。彼は一五三四年、ジュリア通りとバンキ通りにまたがる「キアヴィカの角」で金工ポンペーオを殺害した。同年、ジュリア通りで、今度はチェッリーニが、ピエル・ルイジ・ファルネーゼの雇った刺客にあやうく暗殺されかけた。またジュリア通りでのこと、この通りに家をもつチェッリーニは、一五三八年、ちょうど「キアヴィカの角」で警吏クレスピーノ・デ・ボーニに逮捕された。

教皇レオ一〇世のもとで都市の拡張事業はカンポ・マルツィオ地区に移った。教皇はスクロファ通りとポーポロ広場をむすぶレオニーナ通り［現、リペッタ通り］を開通させたが、これはクレメンス七世のもとでバブイーノ通りの開通とコルソ通りの整備をもって完了するはずの道路システムの開始を告げる事業であった。次にパウルス三世のときにサン・マルコ広場［現、ヴェネツィア広場］とファルネーゼ広場、パニコ通りとパオラ通りが開かれた。このときナヴォーナ広場とカンポ・マルツィオのあいだの道路網も再編された。最後に一五三六年、皇帝カール五世を迎えるに際して、サン・セバスティアーノ門からコンスタンティヌス凱旋門、ティトゥス凱旋門、セプティミウス・セウェルス凱旋門を通ってヴァティカンへといたる道路を開設するのに、五週間という前例のない短期間で取り壊し作業がおこなわれた。このとき封建貴族の塔がたくさん取り壊されたため、ローマは中世的な相貌を失うとともに偉大な首都としての相貌をおび始めた。

カール五世の歓迎でごったがえしていたローマで、チェッリーニは、パウルス三世主催のヴァティカンでの公式行事に参列する前に、あやうく首の骨を折るところだった。夜間に馬を駆っていたところ、「往来の中央にある漆喰片と瓦礫の山」に突っ込み、馬もろともにひっくり返ったが、さいわい大事にはいたらなかった。道路に放置された漆喰片は、どこに廃棄物を積み上げるかを考えるいとまもなく、突貫でおこなわれた取り壊し作業の残骸であった。

しかしローマの都市の表情を変えたのは、なにも皇帝だけではない。聖年のよびかけに団体でやって来た巡礼者、普段の聖地巡礼でサン・ピエトロにやって来た巡礼者もいた。何十万という人が流れ込み、ヴァティカンの金庫に外貨を落としていく。サン・ピエトロ詣でには、全員が規定順路のサンタンジェロ橋を渡る。ヴァティカンに向かう道路には、中世の無秩序な乱開発がずたずたにした古代の街路を復旧したものもあった。すなわち東へは道路（コロナーリ通り）がコルソ通り

のほうに走り、南へは道路が、新バンキ通り、ゴヴェルノ・ヴェッキオ通り、アラコエリ通りを経てカンピドーリオにいたり、最後の道路はサント・スピリト通り、旧バンキ通り、ペッレグリーニ通り、カンポ・デイ・フィオーリを経てオクタウィアの柱廊に向かっていた。これらの街路はチェッリーニが好んで飼い犬のバルッコを連れて散歩したところであり、あるときなどは、犬といっしょに泥棒を追跡し、これらの街路という街路をかけずり回ったこともあった。

その泥棒はちょうどナヴォーナ広場の警察本部で捕まった。飼い犬のバルッコが逃走中の泥棒の「外套を引き裂いて」いたので、臭いを嗅ぎかぎ追跡した犬も捕り物に一役かう。捜し回ったあげくに、チェッリーニは泥棒のジェノヴァ人をナヴォーナ広場の警察本部前で発見。けしかけられた犬が泥棒に飛びかかると、男は目の前の警察本部に逃げ込む。気の毒にも泥棒は工房から盗んだ金銀を返還したうえ留置所に入れられ、数日後にはカンポ・デイ・フィオーリで縛り首になった。

カンポ・デイ・フィオーリからファルネーゼ邸は目と鼻のさきにある。チェッリーニはこの有名なお屋敷に何度も出向かねばならなかった。金工ポンペーオ殺しの一件で、チェッリーニを起訴していたピエル・ルイジ・ファルネーゼのご機嫌をうかがうためである。だが無駄足に終わる。ある日、チェッリーニはジュリア通りで逮捕され、サンタンジェロ城に連行される。サンタンジェロ城、それはローマ時代のチェッリーニの最も象徴的な場所のひとつである。二〇年代のお祭り騒ぎの時代から、それはどこからでも目についた。有名な仮装大会（これについては後述する）が催されたのは、友人ミケランジェロ・ディ・ベルナルディーノの家であったが、この家はちょうどプラーティに通じる「城門の近く」にあった。この城門はヴァティカン区域への入口で、サンタンジェロ城にくっついていたのである。[1]

この有名な古代ローマの遺跡は歴代教皇によって城塞に改造されたものだが、チェッリーニの生涯に名実ともに直接関わっていた。まずは、バンキ通りではじまった巡邏との乱闘のすえに致命傷を負って血だるまになった弟チェッキーノを抱き起こしたのが、サンタンジェロ橋の上でのことだった。この城は、いくらチェッリーニがその斜堤で英雄的と自慢する武勲をあげようとも、ジュリア通りと同じく、不運を象徴する場所だった。いずれにせよ、その輝かしい武勲も、早晩、重苦しい否定的な結果に終わる。つまり、サンタンジェロ城で資金不足のクレメンス七世のためにヴァティカンの宝物を溶解したのだが、これがのちに、この同じ場所に投獄される原因になったのである。この城から大胆にも脱獄したが、途中で片足を折った。やはり城に投獄されているときのことだが、「とんまな」城代と話をしているうちに、チェッリーニは自分が空を飛べる蝙蝠（こうもり）だと信じ込んだ。そのときの彼は、城代の影響やら虐待（毒殺されかかった）やら絶望感やらで、少々頭がおかしくなっていたのだ。自殺まで試みる。結局、ローマ防衛の戦功にもかかわらず、サンタンジェロ城も彼にとっては呪われた場所だったのだ。

概してローマはこの芸術家には不運だった。しょっちゅうどこかでつまずいた。落馬することもあった。チェッリーニの落馬はまだしも、ルイジ・プルチの場合などは、奇襲の傷が癒えたやさきに「馬から落ちて下敷き」になって落命した。危険はどこにでもあり、陥穽もいたるところで口を開けている。狂犬となった野良犬もそのひとつ。「犬

どもが背後から襲いかかり、ひどく噛みついた」。犬より質の悪いチンピラは些細なことで喧嘩をうった。ローマはじつに有害な都市で、悪霊まで跳梁跋扈していた。チェッリーニは確かに悪霊に出会ったことがある。「すばらしい才能」をもつ降霊術師がコロッセオに悪霊を呼び出したときのこと。悪霊は周知のごとく群れをなして出現し、「コロッセオをいっぱいに満たした」。悪魔的な幻影は帰り道でも続いたほど強烈だった。「われわれがバンキ通りの家に帰りつくまで、コロッセオで見た二つの悪霊が、あるいは屋根のうえに昇り、あるいは地上に降りなどして、われわれの前で跳ねていた」のである。

ローマの苦難の一覧表は、これに尽きない。たとえば、バンキ通りの家からチェッリーニを慌てて遁走させた洪水があった。一五三〇年一〇月のテーヴェレ河の氾濫である。「全ローマを水浸しにした大洪水」。チェッリーニの誇張ではない。氾濫は一〇月七日の夜にはじまり九日まで続き、甚大な被害をもたらした。カンポ・デイ・フィオーリとナヴォーナ広場を水没させた世紀有数の大洪水だった。深夜の暗闇のなかを金細工師は窓を抜け出し、裸足と半裸のまま避難するのがやっとだった。ただし、わが身のほかにクレメンス七世から預かっていた貴重品をも救出した。ほとんど全裸であるが、宝石類を身に付けてローマを横切り、教皇が家屋と葡萄園をもつクイリナーレ丘のカヴァッロ山へと直行したのである。

チェッリーニはローマで安穏としていられなかった。一五三一年に造幣局を管理するという最初の栄誉ある招聘のときでさえ、造幣局は彼の記憶のなかでは不信の場所として残った。というのも「バンキ通りの造幣局の扉の前で」貨幣偽造者が絞首刑にされたからである。ローマはまったく油断も隙もない都市だった。

だが幸いなことに栄華はあったし、娼婦たちもいた。事実、チェッリーニのローマは娼婦のローマでもある。当時、娼婦は文字どおり路地にも浴場にも居酒屋にも宿屋にもあふれていた。サヴォナローラとルターの黙示録的な幻視によれば、カトリックの総本山にはバビロンの娼婦が君臨していた。司祭も諸侯も芸術家もみんな姦淫を犯していた。当時の年代記者ステファノ・インフェッスーラはすでに一五世紀末に、妾のいない聖職者はいない、と断言していた。聖職者にいえることは、当然、俗人にもいえる。というわけで情婦のいない独身男性の家はなかった。

老年になるまで頑なに独身をとおしたチェッリーニも、ご多分にもれず、カンパネッラの角のバンキ通りの家に何でもこなす若い女を囲っていた。「このうえない美貌と愛嬌がある」と、彼は記しているが、「しかも、わが青春の肉の悦びをも満足させた」という。一方、ジュリア通りの家には「洗濯女」がいたが、彼女の家庭内労働の性質についても疑問の余地はない。一般にこれら家庭内労働女性は性愛の対象にされたからである。

娼婦の流行は目新しいことではない。中世末期のローマでは、売春婦は郊外地区のサンタ・マリア・イン・コスメディン聖堂の近くの「ボルデレット」「悪所の意」と当時呼ばれていた場所に集められていた。ルネサンス期に始まったことは、その活動範囲が拡散したこと、おもにポンテ地区とパリオーネ地区つまりチェッリーニの家と工房のある地域に拡散したことである。美麗なる被造物はヴァティカンにまで押し寄せ、ボルジア家の教皇アレクサンデル六世が歓待した。この

スペイン人教皇のときに、彼女たちは生きる喜びに向けて堂々と世紀の扉を押し開いた。ヴァティカンの諸室を日ごと夜ごとに満悦させた女たちを、教皇は驚くべき率直さで長編詩にうたいあげた。その詩句は、聖母を霊妙なる天空の精と称える一方で、当代の高名な娼婦をヴァティカンの回廊の豪奢なコーニスと賛美する。ルネサンス期の生ける芸術は永遠の芸術に昇華される。いきおい、画中の聖母も扇情的にしどけなくなるわけだ。

娼婦に関する書物は数を増し、――言葉に厳正な（かつ女嫌いの）アレティーノは、「娼婦」（コルティジャーネ）のかわりに「淫売」（プッターネ）の語を使うが――猥褻な対話のなかにヴィーナスの相場すなわち取引価格が記されることもある。チェッリーニもローマの性愛市場に一条の光を投ずる。つまり娼婦のアンジェリカを身請けするのに、三〇ドゥカートという金額が遣り手ばばあの母親にとって十分な額ではなかったことが分かるからである。

一五二三年にジュリオ・ロマーノの挿絵入りで出版されたアレティーノの『淫猥ソネット集』は、新しい閨房術の指南書として、ヨーロッパ中で飛ぶように売れて評判になった。以後、ローマでは裸体画の花が咲き乱れ、美姫名鑑をかねた詩華集が舞った。裸体像は褒めそやされて第七天（システィーナ礼拝堂のこと）にまで駆け昇る、と揶揄された（出所はかのアレティーノ）。マキァヴェッリもバンデッロもチェッリーニもブラントームもモンテーニュもデュ・ベレも、競って地上の美麗な被造物の頌歌に蘊蓄をかたむけた。ときおりローマの正確な花代を記している者もある。ブラントームは一晩に一二スクード、節操のあるモンテーニュはたったの四スクード、と。

アレティーノが『ラジョナメンティ』で書いているように[5]、ローマは「娼婦の都」であり、嗜好と懐具合に応じて選り取り見取りだった。チェッリーニのあげるサンプルを見ると、その階級と等級にはピンからキリまであった。ただし、専門用語で「コルテジアーナ・オネスタ」という高級娼婦はひとりも登場しない。この水準の娼婦は上流社会で教養人としての役割を担っていた。だがローマはこのカテゴリーの娼婦が成功するのにあまり寄与しなかったようだ。ガスパラ・スタンパとかヴェロニカ・フランコなどは高い教養があると評判だったが、それはヴェネツィアでのことであってローマではなかった。ローマで有名な美神といえば、銀行家アゴスティーノ・キージや名匠ラファエッロを魅了した美貌のインペリアである。バンデッロもその虜になったひとりである。しかし、インペリアは終生、春をひさぐ一介の笑婦にすぎない。チェッリーニのローマには、人文学者タイプの高級娼婦が生き延びる環境がなかったのだ。トゥリア・ダラゴーナだけは、色事のみに専念するのではない、社交界における成功をおさめた。だが、その優雅なトゥリアもすぐにローマを見捨て、ヴェネツィアに去った。カトリックの首都は頽廃の都バビロンであって、肉体の下等な魅惑だけが瀰漫していたのである。

したがってチェッリーニの娼婦たちも、どちらかといえば低品質な代物だった。ところが最高級とはいえないが高級な部類の娼婦がひとり、『自伝』のなかに顔をのぞかせる。「ローマでいちばん愛された娼婦」のアンテーアである。彼女はちょうどチェッリーニが弟の仇を討ったナヴォーナ広場の近くのトッレ・サングィーニャに住んでいた。仇討ち騒動のさなか、アンテーアの家からは「兵士が四人外へ」飛び出

したのに続いて、ローマ随一と評判のこの娼婦も武器を片手に飛び出して来たのだ。

アレティーノが「ジュリア、ラウラ、ルクレッィア、カッサンドラ、ポルツィア、プルデンツィア、パンタシレーア、そしてコルネリア」[6]と列記したような古代風の源氏名は、もはや昔日の輝きを失っていた。一五二六年の人口調査によれば、娼婦はプリマヴェーラ、ルーナ、セルヴァッジャ、ドンナ・オネスタ（これは人口調査の指揮をとったアルメッリーニ枢機卿の情婦の名）といった詩的な名で呼ばれるか、もっと頻繁には出身地の名をとって、アンジョラ・グレカ、クラウディア・フランチェーゼ、レオナルダ・ポルトゲーゼ、パオリアーナ・ロマーナ、カテリーナ・ヴェネツィアーナ、ファウスティーナ・ボロネーゼなどと呼ばれていた。

この最後の女は、一五二四年のある晩、バンキ通りのチェッリーニの家に来たことがある。チェッリーニと同居する男友達で、ファウスティーナとねんごろな仲になっていたのが、連れて来たのである。色事には年季の入ったチェッリーニもこの女を深く知っており、「私にぞっこん惚れていた」ともいう。しかし、女を連れ来たのは友人だから、邪な考えが浮かばないようにと肝に銘じた。「このファウスティーナは友人のものだから、世界中の黄金をもらっても彼女に触れようとさえ思わなかった」。

ところがチェッリーニの忠義心には下心があった。彼が目をつけたのは、ファウスティーナが連れていた小間使いで、一三、四歳ほどの「まっさらな新品」すなわち生娘の少女だった。チェッリーニはすばやく少女を自分のベッドに押し込み、「その夜、かりに女主人のファウスティーナと同衾したとしても、とても得られないほどの満足感を味わった」。ところがこれが毒酒の一献だった、というのも、ペストの徴候をプレゼントされたからである。

その後しばらくしてから、名もない別の女からはフランス病を頂戴した。チェッリーニは「フランス病」と呼び、他の者は「ナポリ病」と呼んだが、要するに梅毒のことである。梅毒はこの数年のうちにヨーロッパ全土に広まり、とりわけローマで――チェッリーニによれば、「この病気は特別に僧侶と仲が良かった」ので――ひどかった。実際、数ある病気のなかでも世紀を代表する流行病であり、犠牲者のなかには教皇ユリウス二世、チェーザレ・ボルジア、英王ヘンリ八世、仏王フランソワ一世、皇帝カール五世、そして人文学者エラスムスといった有名人が名を連ねている。

この性病は突然発生したもので、どこからどう広がったのか誰も知らなかった。一四九四年に仏王シャルル八世とともに南下したフランス軍がもってきたのだろう、というのがもっぱらの噂だった。庶民は、色欲の蔓延を罰するために神が送った神罰だ、とささやき交わした。一六世紀の初頭にすぐれた医学者兼人文学者のフラカストーロが、『梅毒あるいはフランス病』で病気の起源を記述し、『病気の伝染と治療について』でしばしばペストと混同されていた症状を描写した。チェッリーニの場合にも、梅毒とペストの混同が見られた。医者が「フランス病と診断したくなかった」からである。

医者より分別のある金細工師は、すぐに自分の病気がなんであるかを悟った。彼は外科医が勧める効き目のない怪しげな治療法ではなく、聖木というありがたい民間療法にたよった。当時の治療法は一般に危

険の多い水銀療法だったが、彼はこれを採用せず、はやりの新製品を試したのである。それは発見されて間もない新世界から届けられる高価な癒瘡木のことである。この貴重な薬品の輸入は一五一五年に始まり、奇跡を起こす木というわけで「聖木」と命名され、十字架の形にして売り出されていた。

チェッリーニが聖木にすがる以前は、医者の無益な処方箋の他にも、ヴァティカンの宮廷人が勧める矢車草の煎じ薬を試したこともあったが、効き目はなかった。癒瘡木の薬効をまってはじめて、彼は「五日目に」快癒したのであった。

チェッリーニのフランス病への関心は個人的問題にとどまらず、全ローマ的環境の問題でもあった。ローマの悪環境から病気が感染し、その病気をだしに藪医者のインチキ商売が繁盛していたのである。大半は聖職者である患者の信じやすさは、たいへんなものであった。チェッリーニのかかった医者はヤコポ・ダ・カルピという「腕利きの医者」で、「ある種の香料を用いて」梅毒を治療するのが専門だった。が、高くついたのは治療費で、この医者はあっという間に「数千ドゥカート」を荒稼ぎした。

この享楽的なローマではたいそう有益な御仁だと、教皇クレメンス七世自身も「仕事が続けられるように」とりはからったが、医者の方は「ずる賢い男」で自分が何をしているか先刻承知、大金を懐にするとさっさと「ローマからずらかった」。その出立からほどなくして、ヤコポ・ダ・カルピの治療をうけていた患者たちは「以前よりもずっと症状が悪化した」。司教も大司教も枢機卿も他の高位聖職者も全員、まんまと一杯食わされた口だった。「みんな、ローマであの男に香油を塗られてボロボロになった運の悪い連中である」。

ところでチェッリーニがローマで関係した娼婦の人数は、数え方にもよるし、女中や洗濯女を勘定に入れるか否かにもよるが、だいたい五、六人といったところである。しかしこの五、六人というのは、彼が何らかのかたちで書き残した周知の数であって、実際の人数はこれよりずっと多かったはずである。なにしろローマは春をひさぐ女であふれていたのだから。ではいったい娼婦は何人いたのか。ヴィーナスの人数を数えることに没頭していたアンダルシア人の司教フランシスコ・デリカドは、その著『アンダルシアの美女』のなかで一五二〇年に八万人という信じがたい数字をあげている。この数字は間違っているが、少なくとも売春現象の広大無辺さを暗示してはいる。偏執狂的にこの問題を追跡したデリガドにとって、娼婦はどこにでも見つかったのだ。いろいろな人が計算してきたが、歴史家のドリュモーにとっては、一五〇〇〇人というのが妥当な数字である。[7] いずれにせよヨーロッパで一、二を競い、ヴァティカンの宮廷秘書官ジョアシャン・デュ・ベレによれば、それが「ローマの誇り」であった。

ローマの飽くなき放縦がヴィーナス礼賛を助長した。とりわけ芸術家はこのような自然の生み出した傑作を色彩豊かに表現することに腕を競った。ラファエッロの《フォルナリーナ》が代表的な一例である。ペルジーノはアンテーアのすぐれた肖像画を残した。彼女が住んでいたトッレ・サングィーニャの近所には、マトレーマと呼ばれたルクレツィアが住んでいた。そのルクレツィアの輝かしい思い出は、アレティーノの『ラジョナメンティ』に描かれている。当時の多くの聖母像の優雅さは、人間的なものを神的なものへ一気呵成に変容させる画家の情

熱を反映したものに違いあるまい。チェッリーニのフィレンツェ時代の友人フランチェスコ・リッピの祖父フィリッポ・リッピの場合が有名である。画僧フィリッポは、プラートの修道女ルクレツィア・ブーティを画中で純潔の聖処女に仕立てたが、じつは仕事の合間あいまに同衾し、フィリピーノ・リッピをもうけた。ちなみに、このフィリピーノの素描が、チェッリーニのローマへの強い憧憬を育んだのだった。

一般に芸術家は娼婦とはなじみが深く、惚れることもあれば、惚れられることもあった。インペリアの自殺は、ラファエッロがフォルナリーナに移り気したことと無関係ではない。チェッリーニはチェッリーニで、シチリアの美姫アンジェリカを捜し求めて「半狂乱」になったほどだし、一方、パンタシレーアはチェッリーニに「ぞっこん惚れて」いた。娼婦が芸術家のモデルになる場合は別であるが、両者のこみいった関係には、金銭の授受が介在しないこともあった。チェッリーニの工房に泥棒が入ったのは、一日の仕事を終えて、そうしたモデルのひとりと一緒に寝ているときだった。「このような肉体労働のあとでは、ふつう男の眠りは浅いものではなく、ぐっすりと熟睡するものだが、それに比べて私の眠りは相当に浅かったのだが」、云々。

ローマの「カラスたち」――チェッリーニは娼婦をそう呼んでいた――のうちで、いちばんよく顔を合わせたのはパンタシレーアだった。彼女は陽気な芸術仲間のお祭り騒ぎに参加しては、気難しいチェッリーニのわがままにいちいち付き合って、たとえば、バッキアッカへの奉仕を命じられても不平をいわなかった。ローマに典型的な乱痴気騒ぎの宴席では、チェッリーニがスペイン人の少年を女装させ、パンタシレーアをだましたこともあった。変装が男女双方にとっての共通の慰みだったことは、男装娼婦に対する裁判記録がローマには山ほどあることが証明している。アレティーノもある医者の例を紹介しているが、この医者はいつもベアトリーチェ・ロマーナに「少年の服を着せ、下男として使っていた」[8]。

ともかくパンタシレーアはあらゆる種類の仮装には慣れっこになっていたはずである。ところが今度ばかりはチェッリーニの悪ふざけに我慢がならなかった。バッキアッカに譲渡された身の恨みもあった。そこで彼女は稀代の伊達男ルイジ・プルチと情を通じることで意趣返しをたくらんだ。プルチはチェッリーニが家に引き取ってやったこともある親友の間柄である。チェッリーニはパンタシレーアには気がないとはいいながら、怒りを爆発させて二人を夜襲した。

チェッリーニは自分の「カラスたち」を、慣用的区分にしたがっていうならば、「高級娼婦（オネスク）」にしたいと考えていた。これは娼婦の教養の区分であると同時に貧富の区分でもあった。すなわち華やかな成功をおさめた娼婦とうらぶれた娼婦。前者が「オネスタ」で後者は違う。パンタシレーアがどのカテゴリーに属するのかは断言できないが、かなりの評判をとっていたことからすると、花柳界では裕福な方だったのかも知れない。

裕福な娼婦は納税者の仲間入りをし、ローマのような都市では相当な重税を負担する者もいた。娼婦もキリスト教会の収支バランスの帳尻をあわせるのに一役かっていたことになる。ピエトロ・ストロッツィに愛された有名な娼婦イザベッラ・ディ・ルーナなどは、ローマのその名も「壊れた橋（ポンテ・ロット）」の再建事業のための特別課税で、高額納税者中の上位に名を連ねている。土木工事は費用がかかったので、娼婦を含む

全市民がローマ再建のために納税義務を分担したのである。それどころか自前で建設活動に参加する娼婦もいた。チェーザレ・ボルジアの情婦だったフィアメッタ・フィオレンティーナは、一五一二年、自分の墓所としてサン・タゴスティーノ聖堂内に礼拝堂を建立した。これに範をとったトゥリア・ダラゴーナも、同じサン・タゴスティーノ聖堂のフィアメッタが眠る隣に立派な墓を造り、一五五六年に荘厳な葬儀とともに埋葬された。またアゴスティーノ・キージは、サン・ジョルジョ聖堂内にインペリアを記念する壮麗な慰霊碑を建立している。

すべては敬虔な事業である。しかし娼婦の収入に眼を光らせていたヴァティカン当局としては、直接税の方に関心があった。ヴァティカンにとって主要な財源である観光収入のうち、ヴィーナスの肉体が重要な地位を占めていた。巡礼者の多くが献納金をヴィーナスの愛に支払っていたからである。「ローマ見物に来る人は、古いものを見たあとで新しいもの、つまり女人をも拝んで、豪勢に遊んでみたいと思うもの」とは、例のアレティーノの弁である。[9] 要するに、ヴァティカン当局にしてみれば、神殿のフクロウが賽銭を横取りしているというわけだ。だからアレクサンデル六世は娼婦の収入を調査する「遊郭管理事務所」を設置した。一五一七年には、レオ一〇世が娼婦への直接課税に踏み切る。この直接税は露骨に「淫売税」と呼ばれた。最後にパウルス三世が娼婦の収入の課税対象額を拡大する。いくらルターをはじめとする多くの人びとが醜聞を声高に告発しようとも、廃娼運動には発展しないわけだ。

とはいえ、結局は歴代教皇も非難の声を無視できなくなり、ローマを浄化するために重い腰をあげざるをえなかった。折から鬨(とき)の声をあげていたイグナティウス・デ・ロヨラが、一五三六年、罪の娘を収容するヴェルジニ・ミゼラービリ尼僧院を創設する。これは徳化運動の第一歩だったが、幾多の障害と根強い抵抗にあった。従来の習慣を廃絶することは、すでに経済危機に見舞われているローマをさらに貧困化することを意味していたからである。ヴァティカンの財政だけの問題ではなかった。快楽の会計には、強力な圧力団体の銀行も一枚加わっていた。夜の美女たちは、せっせと金をかせいで銀行に預金していたので、その相当額の資本運用によって金融活動をも助成していたのである。だからこそ、反宗教改革に後押しされたピウス五世が強攻策を打ち出したとき、パニックに陥り、最も頑強に反対したのは銀行業界であった。

その強攻策とは、娼婦を全員トラステーヴェレに強制移住させる隔離政策であった。すぐにトラステーヴェレの住民が反発し、屈辱的な雑居を拒否した。銀行業界も慎重かつ決然と抗議の意思を表明した。いくつかの銀行は倒産しかねないと脅した。ゴスタルディ銀行などは、倒産の場合の負債総額を一七万スクードと見積もった。ジャン・ドリュモーによれば、これは体のいい「恐喝」であった。[10]

チェッリーニはローマの心地よい混乱を楽しんだ。散財とはいかないが、多大なエネルギーをまき散らしながら、混乱のさなかを我が物顔で闊歩した。一五一九年にローマに来たのは古美術で一儲けするためだったが、別の理由でこの町が気に入った。芸術がなおざりにされたわけではないが、芸術よりもまず生きること。さんざんな目にもあったが、いろいろな恋愛も経験した。パリでもなく、フィレンツェでもさらになく、享楽的なキリスト教の自堕落なローマこそが、禁断の快

楽を彼に提供し、心底没頭することを可能にした。彼は終生、男女の美貌のモデルと頻繁に性関係をもったが、環境が違った。彼が愛するローマの荒々しい感触は、他のどの都市にもなかった。教皇都市の愉快なお祭り騒ぎには黒ミサの魅力があった。事実、そうしたお祭り騒ぎでは「ふざけた言葉で教皇の祝福を」冒涜した。カトリックの教皇を嘲笑したのは、ドイツ人傭兵ばかりではなかったのだ。

チェッリーニの『自伝』は、一六世紀の前半、とりわけ二〇年代、三〇年代におけるローマの若き芸術家たちの暮らしぶりを活写した貴重な資料である。「われらの故郷（くに）の」フィレンツェ人にジュリオ・ロマーノを加えて、画家、彫刻家、金細工師の仕事ぶりと気晴らしを巧みな筆致で描いている。この濃密な集団のなかから、ローマ劫掠（サッコ・ディ・ローマ）ののちにマニエリスムが姿を現すことになる。

注

（1）M. Buonarroti, *Rime*, Rizzoli, Milano, 1981, p. 303.

（2）一六世紀ヨーロッパ史の権威フェルナン・ブローデルは、当時のすべてのローマ美術を「カトリックのプロパガンダ」と見る。F. Braudel, *Civiltà e imperi nel Mediterraneo dell'età di Filippo II*, trad. it., Einaudi, Torino, 1985, p. 881.［フェルナン・ブローデル『地中海（Ⅲ）』浜名優美訳、藤原書店、一九九三年、二八九ページ。］

（3）G. Simoncini, *Città e società nel Rinascimento*, Einaudi, Torino, 1974, vol. I, p. 100.

（4）この門はまもなくなくなったが、一五五七年のバルトロメオ・ファレーティの版画にはっきりと見て取れる。この版画は次の書に所収。C. D'Onofrio, *Castel S. Angelo nella storia di Roma e del papato*, Ser, Roma, 1982, p. 35.

（5）P. Aretino, *I ragionamenti*, Sampietro, Bologna, s. d., p. 260.［アレティーノ『ラジオナメンティ――女のおしゃべり――』結城豊太訳、角川文庫、一九七九年。］

（6）Ivi, p. 92.

（7）J. Delumeau, *Vie économique et sociale à Rome au XVIe siècle*, De Boccard, Paris, 1957, vol. I, p. 422.

（8）P. Aretino, *I ragionamenti*, cit., p. 259.

（9）Ivi, p. 81.

（10）P. Larivaille, *La vita quotidiana delle cortigiane nell'Italia del Rinascimento*, trad. it., Rizzoli, Milano, 1983, p. 198.［ポール・ラリヴァイユ『ルネサンスの高級娼婦』森田義之・白崎容子・豊田雅子訳、平凡社、一九九三年、二七四ページ。］

［まつもと　のりあき／阪南大学教授］